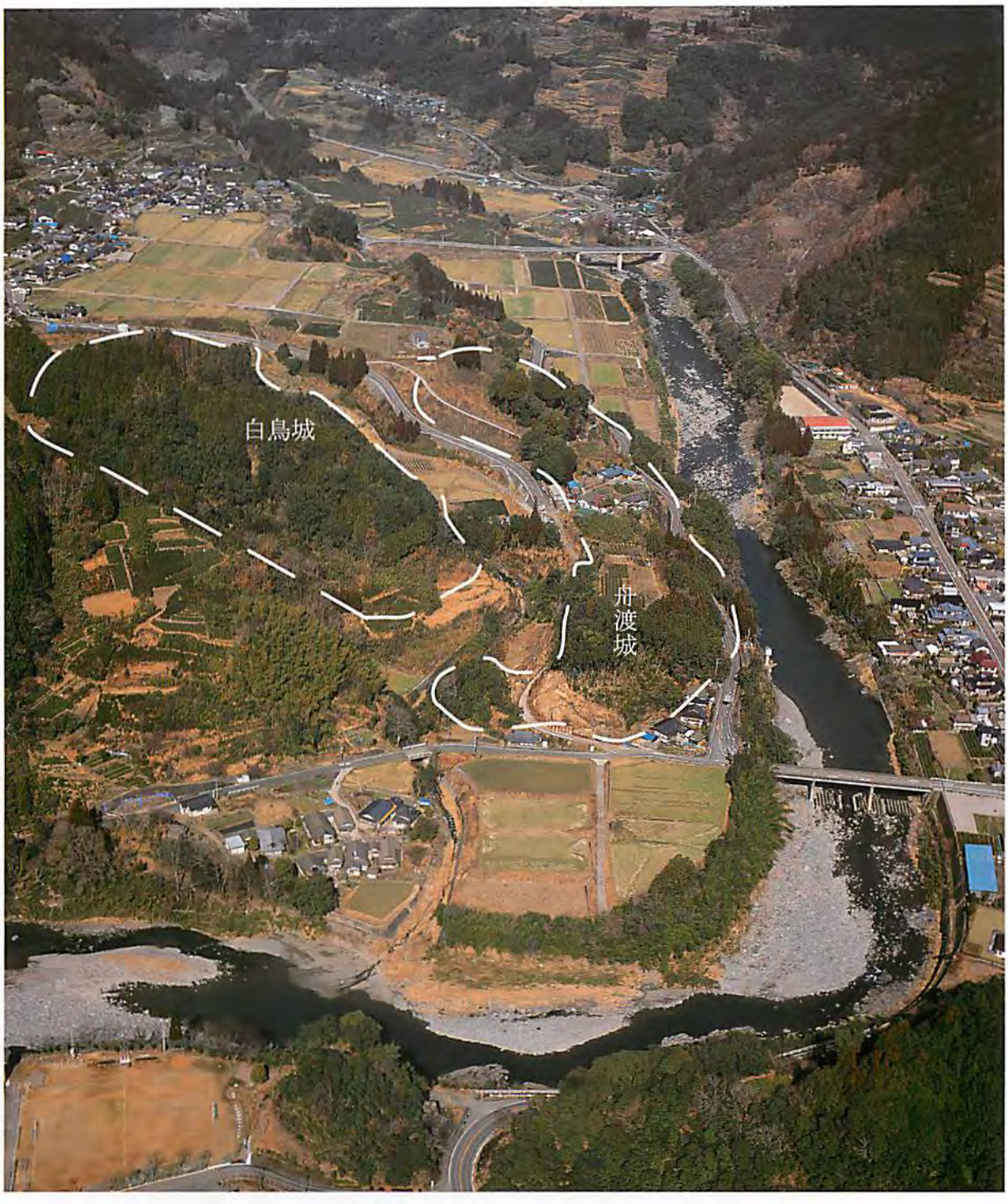
熊本県文化財調査報告第251集

舟　渡　城　跡

一般県道相良人吉線単県道路改良事業に伴う埋蔵文化財調査

２００９．１２

熊本県教育委員会



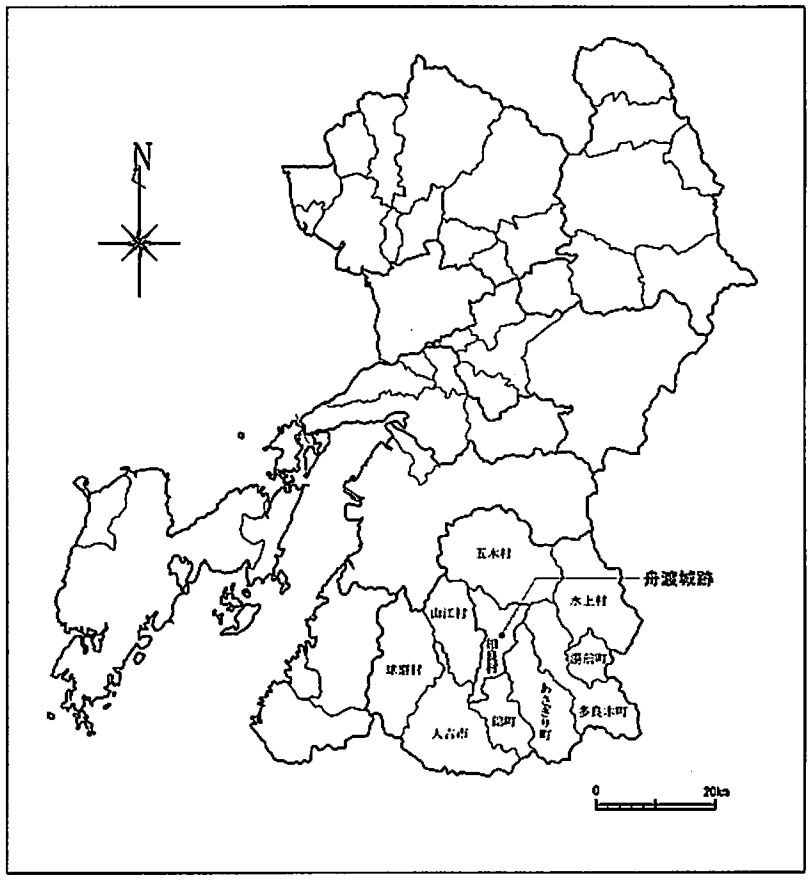
舟渡城と白鳥城

四浦地区周辺

調査区全景

舟　渡　城　跡

一般県道相良人吉線単県道路改良事業に伴う埋蔵文化財調査



２００９．１２

熊本県教育委員会

序

熊本県教育委員会では、平成17年度に、一般県道相良人吉線単県道路改良事業に伴い、舟渡城跡の発掘調査を実施しました。

舟渡城は、熊本県球磨郡相良村四浦西地内の清流川辺川中流域にあります。川辺川によって刻まれた深い谷間に位置し、遺跡の東側から南側へと川辺川が廻り込み、西側には急峻な山があります。

舟渡城跡の調査においては、中世の遺跡であることが確認されました。特に西に隣接する白鳥城跡と共に自然の地形を生かした城を築いたものと考えられます。

今回の調査区は中世城の斜面部分で、以前の道路建設によりほとんどが削平を受けていましたが、調査区外ですが城の主郭はのこされており、今後の調査によって更に舟渡城について明らかにされることが期待されます。

最後に、調査の円滑な実施に御理解と御協力を頂いた球磨地域振興局土木部を始め、相良村教育委員会、人吉教育委員会、地元の方々に対して厚くお礼申し上げます。

平成21年12月25日

熊本県教育長　山本　隆生

例　言

1　本書は、熊本県球磨郡相良村四浦地内所在の舟渡城跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2　本遺跡の調査は、一般県道相良人吉線単県道路改良事業に伴う事前調査として、熊本県土木部の依頼を受けて平成17年度に熊本県教育庁文化課が実施した。
3　調査は後藤克博、土野雄貴が担当した。
4　発掘調査現場での遺構実測の一部及び地形測量業務は、株式会社九州文化財研究所に委託した。
5　空中写真撮影業務は、九州航空株式会社に委託した。
6　遺構のトレースは、アイシン精機株式会社が開発したデジタルトレースソフト「とれーす３Ｄくん」を使用し、坂本千恵、後藤が行った。
7　遺物の実測・トレースは、坂本が行った。
8　遺物の写真撮影は、村田百合子を中心に行った。
9　本遺跡の出土遺物、写真及び図面などは、すべて熊本県文化財資料室（熊本県下益城郡城南町沈目）にて保管している。資料の有効な活用を望む。
10　本書の編集は、熊本県教育庁文化課で行い、後藤が行った。

凡　例

1　平面直角座標は、世界測地系（日本測地系2000）を使用している。方位は座標軸を基準とした座標北を示している。
2　本書に使用したレベル（Ｌ＝）は標高を示す。
3　本書では、地形図、遺構図等の縮尺は全て異なるので、挿図中のスケールを参照されたい。
4　本書に掲載している遺物の縮尺についても挿図中のスケールを参照されたい。
6　各層位の土色及び土器の土色は、「新版標準土色帖」（農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修）による。

「舟渡城跡」目次

巻頭カラー
序文
例言
凡例
第１章　調査の概要 …… 1
　第１節　調査にいたる経過 …… 1
　第２節　調査及び整理の組織 …… 1
　第３節　調査の過程 …… 1
第２章　遺跡の位置と環境 …… 2
　第１節　地理的環境 …… 2
　第２節　歴史的環境 …… 2
第３章　調査の方法と成果 …… 3
　第１節　調査の方法 …… 3
　第２節　調査の成果 …… 3
第４章　総括 …… 8
参考文献
報告書抄録
奥付

挿図目次

第１図　相良村周辺の中世城
第２図　舟渡城跡地形測量図
第３図　１区～３区土層断面図
第４図　舟渡城縄張り図
第５図　灯明皿
第６図　炭焼き窯実測図
第７図　墓実測図
第８図　四浦村古城図

表目次

第１表　相良村内の遺跡一覧（中世以外）

写真目次

空撮１　舟渡城と白鳥城
空撮２　四浦地区周辺
空撮３　調査区全景
PL. 1　竪堀（北から）
PL. 2　竪堀（南から）
PL. 3　寛永通宝（表、裏）
PL. 4　炭焼き窯（搬入口、焚口、天井及び煙突）
PL. 5　３区石垣
PL. 6　調査区出土遺物　（Ｎｏ．１～１１）

第１章　調査の概要

第１節　調査にいたる経過

本遺跡の調査は、一般県道相良人吉線単県道路改良事業に伴うものである。

事業予定地内に埋蔵文化財が存在する可能性が高いことから、熊本県文化課は事業の実施に先立ち試掘調査が必要であることを通知した。試掘調査を実施した結果、石積遺構などが発見され、遺跡の存在が確認された。そのため、球磨地域振興局土木部工務課と協議を重ねた上で平成17年に調査を行うこととなった。

第２節　調査及び整理の組織

調査及び整理は下記の組織で行った（所属などは当時のものである）。

調査

調査責任者　島津義昭（文化課長）、調査総括　西住欣一郎（文化財調査第２係長）、調査事務局　四元正明（主幹兼総務係長）、塚原健一（主任主事）、小谷仁志（主任主事）、調査担当　後藤克博（文化財保護主事）、土野雄貴（嘱託職員）

整理・報告書作成（平成20年度）

整理責任者　米岡正治（文化課長）、整理総括　西住欣一郎（主幹兼調査第２係長）、整理事務局　高宮優美（主幹兼総務係長）、山田京子（参事）、高松克行（主任主事）

整理担当　後藤克博（文化財保護主事）、坂本千恵（嘱託職員）

調査指導及び協力者（敬称略）

地元の方々、相良村教育委員会、出合宏光、人吉教育委員会、熊本県土木部、球磨地域振興局土木部工務課、木村元弘、岡本真也、木村龍生、沖　誠介

発掘調査作業員（平成17年度）　岩崎光子、乙益豊子、小柏之子、椎葉ひとみ、永田朝子、中竹佳代、中村三香、中村陽子、西京子、原口キエ、平山茂光、福田清香、山形元子、米田正成、桑原優子

整理作業員（平成20年度）

山下千栄子、益田久子、後藤直美、宮崎典子、川井田久子、古閑知子、佐藤吉成

第３節　調査の過程

調査は、平成17年10月24日（月）から平成18年３月23日（木）まで実施した。

【平成17年10月】

24日、０５－１区Ｈ鋼設置のための道路側断面を掘削工事に立ち会う。石積みは、岩盤に県道を敷設するのに敷かれたものと思われる。昭和初期までは、石積みは現在使われている県道に沿っていて、石積みの上に井戸が点在することを確認する。

【平成17年11月】

14日、１区南面中央部に１区の先行トレンチを設定する。竪堀に見える掘り込み部を確認し、サブトレンチを設定する。１区表土はぎを行う。25日、調査区２区に先行トレンチを設定し２区の表土はぎを開始する。

28日、３区の先行トレンチを設定し、トレンチ掘削を行う。１区から順次１層を掘削していくことにする。

【平成17年12月】

20日、３区の１層掘削を始める。急斜面のため作業は難航する。

【平成18年１月】

25日、３区で石垣を検出する。斜面中位の県道と斜面下の耕作地造成のために掘削を受けていると思われる。

【平成18年３月】

８日、調査区１区の東側（調査区外）に虎口のように見える土塁の落ち込み部を検出する。13日、１区で灯明皿出土する。23日、遺物・機材等を整理・撤出し、調査を終了する。

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

熊本県は九州のほぼ中央にあり、県の東側は九州山地の山岳地帯である。この山岳地帯に人吉盆地が位置し、この盆地の中央部を南北に二分するように、日本３大急流のひとつである球磨川が東西に貫流している。

舟渡城跡は、人吉盆地の北側に位置し、人吉盆地に流れ込む川辺川右岸に所在する。人吉盆地北側では未固結堆積物及び火砕流堆積物からなる小起伏丘陵地が発達し、丘堆積物の下には加久藤・阿蘇・入戸の各火砕流堆積が分布する。これらの火砕流は直接地表面を覆い、広範囲にシラス及び加久藤火砕流が分布する。

舟渡城跡は川辺川の右岸相良村四浦地内阿蘇溶結凝灰岩、標高 180～199 mほどの丘陵上に位置している。

第２節　歴史的環境

歴史時代以降

相良村の奈良・平安時代の遺跡として挙げられるのは少ない。深水谷川遺跡 (21) がその一つである。深水谷川遺跡では、１０世紀の掘立柱建物が検出されている。多くの灯明皿が出土している。

本遺跡が所在する地域は鎌倉時代には永吉庄と呼ばれ、建久二年の「平河師高譲状」に初めて「永吉庄初神村」として登場する。相良氏が球磨へ下向してくるのも鎌倉時代である。

深田村灰塚遺跡、多良木町蓮花寺跡、相良頼景館跡などで発掘調査が行われている。

南北朝時代には球磨盆地では多良木町に本拠を置く上相良氏と人吉市に本拠を置く下相良氏による球磨支配をかけた抗争が激化する。その影響を受け、球磨川及びその支流に多くの中世城郭が出現する。これまでに高城跡、山田城跡、矢黒城跡、荒狩倉城跡、火繰城跡、多良木町里、蔵城跡等の城跡が発掘調査されている。南北朝の乱が終わると、小規模の反乱はあるものの相良氏の球磨支配が強まり、江戸時代末までその支配は続く。人吉市に相良氏の居城で、国指定史跡跡「人吉城」がある。

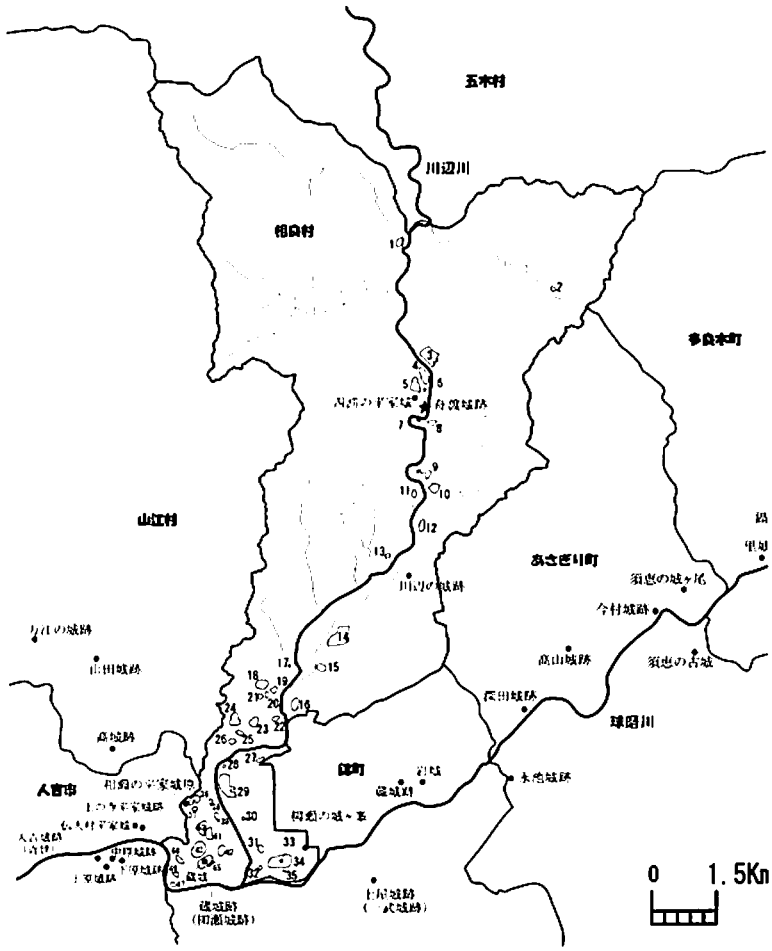


図１　相良村周辺の中世城

表１　相良村内の遺跡一覧（中世以外）

1	野原（縄文～中世）	25	小田下（縄文～中世）
2	夜狩尾（縄文）	26	湯戸山古墳群（古墳）
3	小野（縄文）	27	吉野尾古墳群（古墳）
4	田尻（縄文）	28	立神（縄文～中世）
5	初神（縄文・弥生）	29	三石（縄文・弥生）
6	初神洞窟（縄文）	30	三石横穴群（古墳）
7	尾崎（古墳～中世）	31	入口（弥生）
8	中松館（縄文）	32	出口（旧石器）
9	磯山（縄文）	33	井沢畑段金発見地（古代・中世）
10	平野（縄文）	34	井沢（縄文・弥生）
11	平川（縄文）	35	小原横穴群（古墳）
12	迫取野（縄文）	36	沖原（縄文～中世）
13	豆（縄文）	37	永谷（縄文）
14	川辺（縄文）	38	鼠毛（縄文～中世）
15	上園（縄文～中世）	39	中ノ口（弥生）
16	畑里迫（縄文～中世）	40	貴井（縄文～中世）
17	両宮館（縄文～中世）	41	上原古墳群（古墳）
18	大野（縄文）	42	八田（縄文～中世）
19	石坂鎗野古墳群（古墳）	43	人吉ゴルフクラブ（縄文～中世）
20	深川小園（縄文～中世）	44	十島（縄文）
21	深川・谷川（縄文～中世）	45	陸の内横穴群（古墳）
22	延内（縄文～中世）	46	今村（中世）
23	鳥越（縄文）	47	安養寺跡（中世）
24	西原（縄文）		

第３章　調査の方法と成果

第１節　調査の方法

舟渡城跡は比高約 19 mの山に築かれた山城である。主軸ラインの尾根筋は、Ｎ５°Ｅの方向を示し、全長約100 mを測る。尾根筋には「城」と呼ばれる館の推定地があり、南面に堀切が確認される。南面は舌状に下り、凝灰岩の岩山となっている。この山の南面中腹を東から南を通って西面を北上する県道が通っている。

今回、調査の対象となったのは、この県道の拡幅部分で、山の中腹の県道を挟んで上下の斜面にあたる。

調査区はこの県道によって３つの区画に分けられ、南面の山城に通じる斜面を１区、県道を挟んで南西の部分を２区、道路西側の下斜面を３区とした。

本調査は木の伐採を森林組合に依頼し、１層より上位にある表土・腐葉土を重機が入らないので作業員によって取り、作業員によって遺構確認作業を行った。その後、調査区ごとに掘り下げ、遺構の検出、実測図の作成、遺物の取り上げ、写真撮影を行った。遺構確認が困難な場合は、必要に応じてサブトレンチを設定し、遺構検出に努めた。なお、遺物は基本的にグリッド一括での取り上げとし、必要に応じて光波測距儀を使用した個別取り上げを行った。

第２節　調査の成果

１．調査区１区

調査の調査面積は約 7500㎡である。この内この１区が 670㎡を占める。本調査では試掘・確認調査の結果を基に、表土剥ぎおよび人力による掘り下げを行った。掘り下げていくと調査地に鉄塔が設置されていた。トレンチ調査による試掘・確認調査を行い、遺物包含層と遺構検出面までの層の堆積状況などを確認した。トレンチで土層堆積状況を見てみると、腐葉土、赤化したシラス、シラス、凝灰岩となっており、腐葉土の下は移動してきたシラスであることが分かった。

遺構は、竪堀の堀切を確認した。この堀切幅５m、長さ 20 mになる。シラスまで達している。彫り込みの上部は掘削により削平を受けていた。中世時代に竪堀の堀切が掘られ、その外形が残っていると判断した。中世の遺物が出土していないため床面が中世のものかどうかは断定できない。竪堀側面最上部から寛永通宝を表採する。

調査区１区で確認できた遺構は竪堀ある。調査区外であるが、１区の北側には尾根の先端を切り開いて建てられたお堂が残る。その東側には近世から現代までの墓域が広がっていた。また、南面山道の中腹にも墓が２基残されていた。墓石から古い物で江戸中期のものであった。お堂から南斜面への縁で、灯明皿２個ほか、黒曜石を表採した。

２．調査区２区

調査区２区は舟渡城の南西部に当たる。本来尾根が１区から２区へ繋がっていたものと思われる。しかし昭和 40 年代の道路建設により切り通しが設けられていた。この道路は南側を通り南西部を回り込み、西側を走る。郭と見えた部分には鉄塔の残部があり、削平が激しかった。

３．調査区３区

３区の下方には田が作られている。現在は休耕田であるが、用水が設けられている。休耕田となったあと檜が植えられていたが、今回の事業のため伐採。年輪を観察することができた。この田は休耕田となり 28 年は過ぎていることが分かった。したがって田を作るために整備されたのはそれ以前となる。

県道下の急斜面の最下部に石垣が存在する。３区の底部は田を造成されており、用水が引かれている。この用水が石垣の上を走る。この石垣の裏の土を調査すると新しい遺物が混入しており、水田の造成時に造られたものだと思われる。客土から須恵器片１点、磨製石斧１点が出土する。

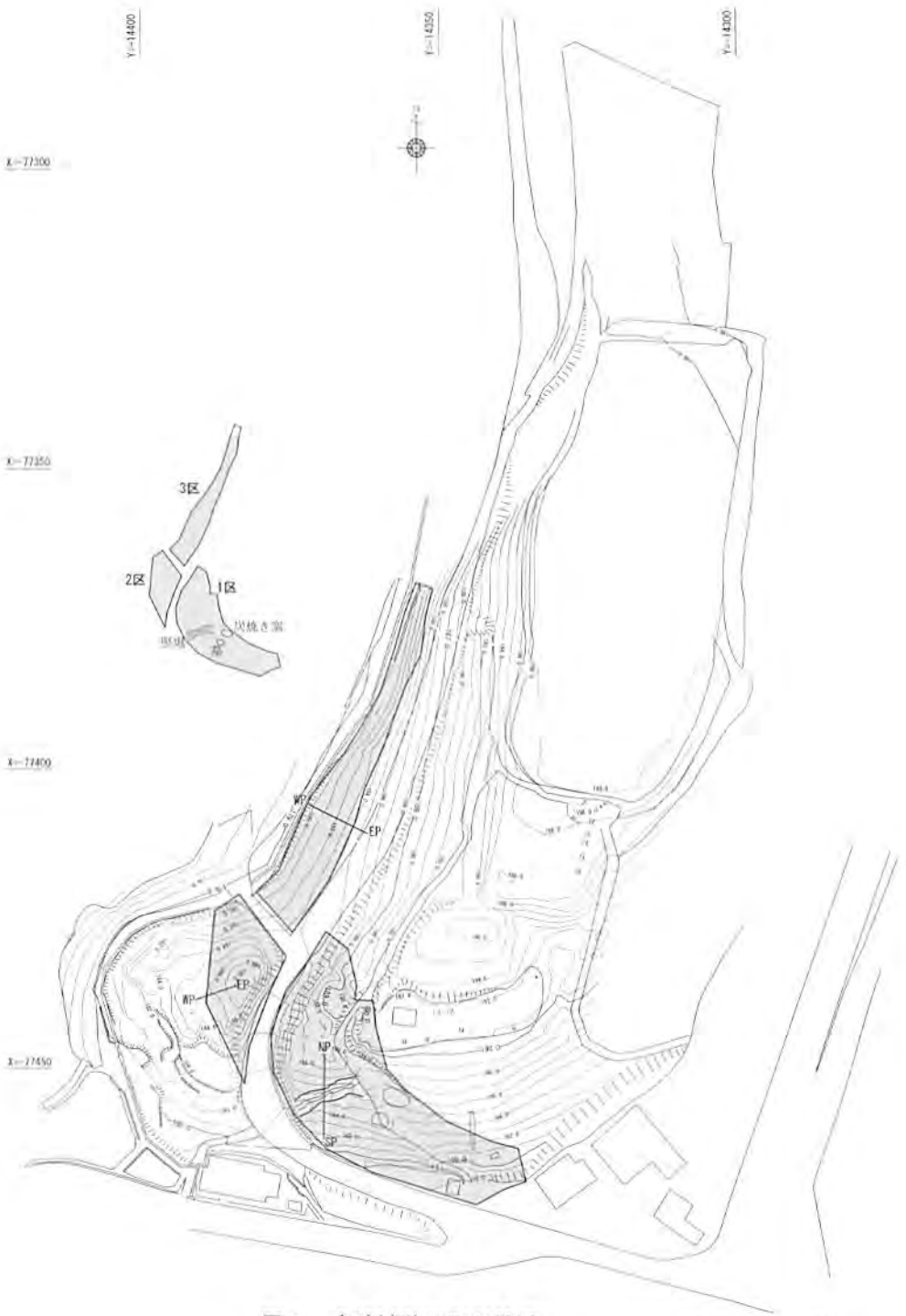


図２　舟渡城跡地形測量図

４．舟渡城跡

舟渡城跡は南北に伸びる山の尾根上にある。尾根の北側に比高約 19 mに位置する南北に約 78 m、東西に約 30 mの平地がある。現在「城」と呼ばれている部分で、舟渡城の主郭部分と考えている。磁器片や土師器片を表採することができた。

舟渡城跡の東西は急斜面をなし、それぞれ川辺川、初神谷川にいたる。南側斜面は東西斜面に比べて緩い。1区の南面に竪堀が見られ、県道を越えて南西方向に伸びていたことが伺える。舟渡城は東西は急斜面で自然の地形を生かした山城で、緩やかな南側に竪堀を備えていたものと思われる。

1区の西側及び２区の頂上部に郭とも思える平坦部ある。掘り下げてみると両方とも鉄塔の残部があり、郭であったとは断定できない。調査区２区の南側に平坦部があり、南側から西側にかけて土塁が見られる。調査区外であるため確認はできなかった。

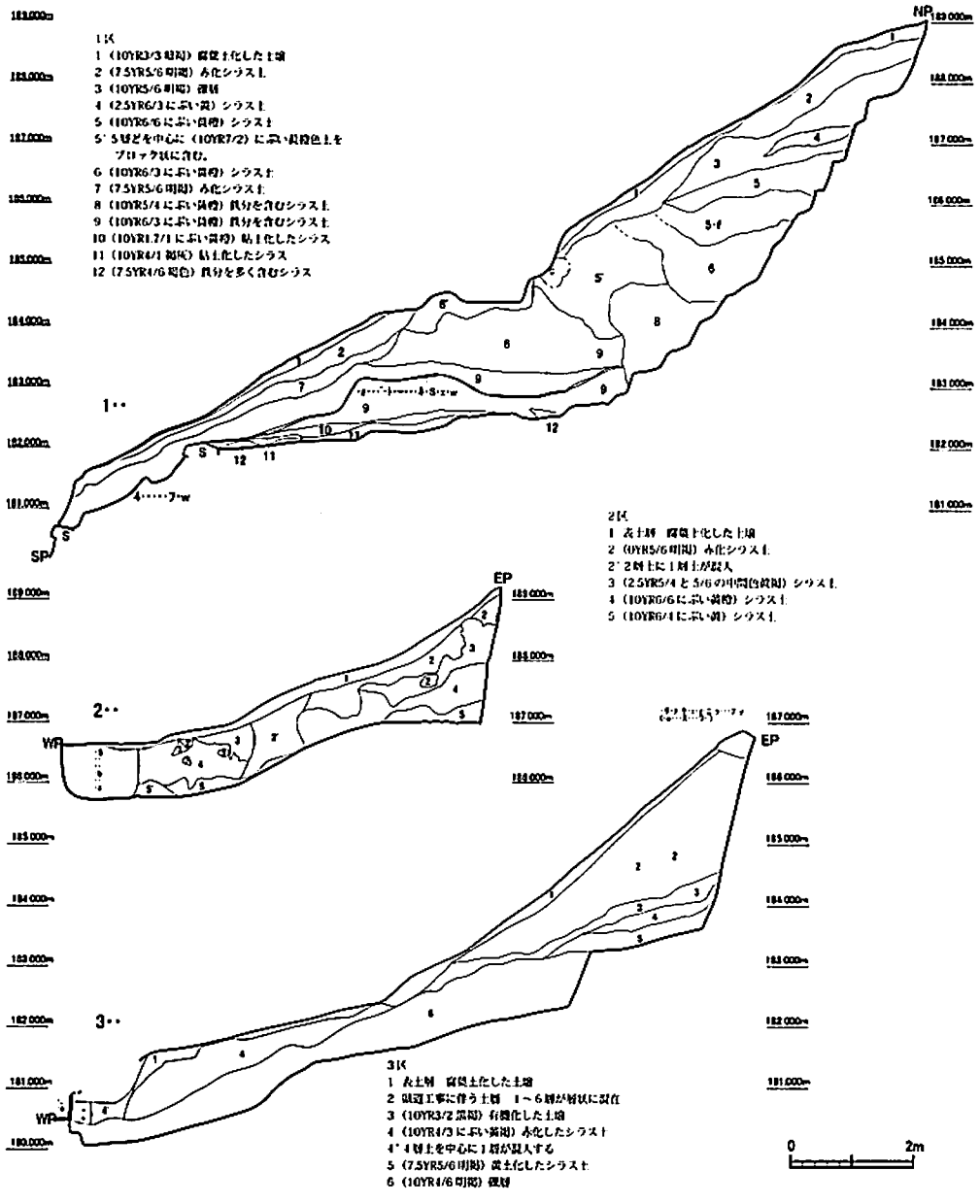


図３　１区～３区土層断面図

本遺跡の基本的な層序は、以下の通りである。

客土　茶褐色土。昭和40年代以前に山を掘削した時の客土

１層　表土。主に腐葉土

２層　シラス　火砕流堆積物。堀切の最下面。遺物なし。

３層　黄褐色ローム。遺構、遺物なし。

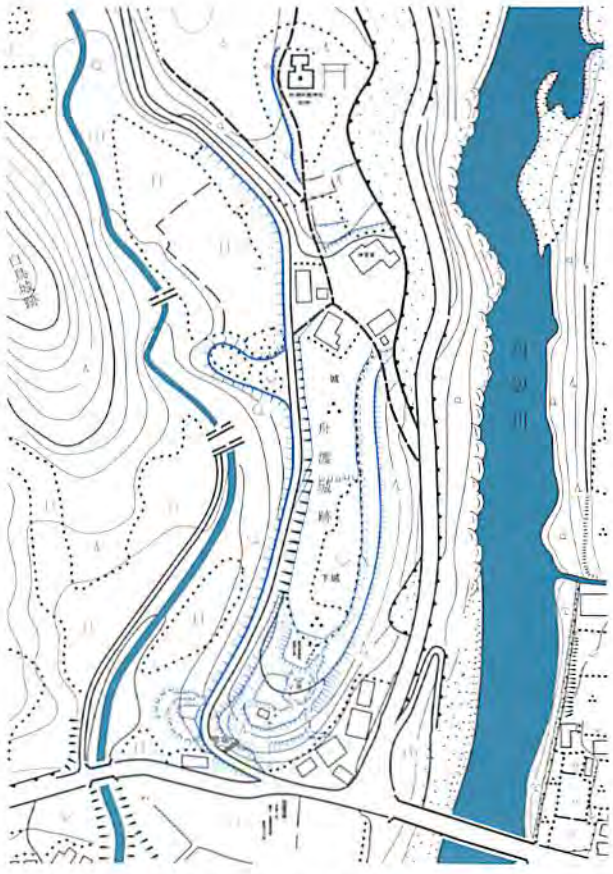
本調査区の１層は樹木の枯葉等が重なり、腐葉土化したものである。この１層を取り除くと、２層は赤化したシラスである。非溶結火砕流が堆積したあと風雨等により移動し、酸化したものであろう。調査区１区から３区までの殆どがこの層序となっている。したがって、殆どの部分が削平を受けており、旧地形を留めているところがない状態であった。

5　舟渡城と白鳥城

舟渡城は山城であり、周囲の地形をうまく利用している。前述のように東西を川辺川と初神谷川に挟まれ、この東西の川から上るのは不可能という程急峻である。

南面は現在かなりの削平を受けているが、東西に比べると傾斜が緩やである。そこで、竪堀を設け南側からの進入に備えていたのであろう。尾根伝いに北へ向かうと初神集落へとつながる。当時、初神集落に至るルートとして考えられるのは、初神谷川に沿って川沿いを登り、初神集落に至るルートがある。このルートからの進入を防ぐかのように、初神谷川を挟んで白鳥城がある。

白鳥城を踏査すると、細い道が尾根伝いに伸び、平坦部や急な崖がある。遺物等は表採することはできなかった。



人吉市鶴嶋氏作成舟渡城縄張り図を改変

図４　舟渡城縄張り図

6　遺構

（１）竪堀

竪堀は、南斜面南西部から中腹まで北上する。中腹で竪堀は途切れ、斜め方向に横断している現道にぶつかっている。調査区外であるが、この南斜面の東側に虎口を思わせる掘り込みがある。この竪堀が横堀につながっていた可能性はあるものの確証はない。

舟渡城跡の山の南斜面はかなり削平を受けており、地表面はシラスの２次堆積物で覆われている。竪堀の地表面もこの堆積物で覆われている。

竪堀内の遺物としては、西壁の上位で寛永通宝が１点出土しているのみで、この遺構内に限れば築城時期を特定できるものは出土しなかった。

PL．１　竪堀（北から）

PL．２　竪堀（南から）

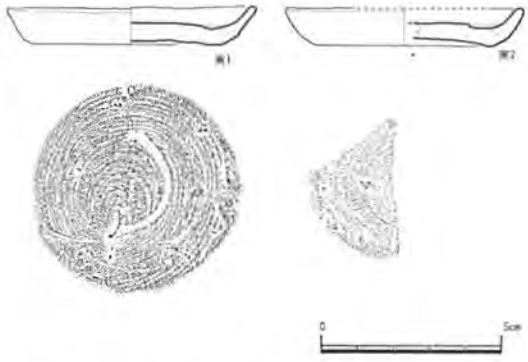
7　遺物

（1）土師器

調査区1区から土師器が4点出土している。いずれも南斜面の肩部から出土した。

4点出土しているがいずれも表面が磨耗している。うち3点は小皿である。完形に近い小皿が1点(1)あり、口径は6.9ｃｍ、底部は6.3ｃｍ器高0.9ｃｍで、器高の低い小型の皿である。口縁部は丸みを持ち、肩部はヘラケズリである。底部は糸切り底である。

図5　灯明皿



小皿2も1とほぼ同じ大きさで、口縁部がやや丸みを帯びて立ち上がる。器高が1.1ｃｍである。これらの土師器はいずれも1層腐葉土を取り除いた2層表面で出土しており、御堂からの流れ込みの可能性が高い。

（2）古銭

寛永通宝が調査区1区から1点出土している。出土地点は竪堀西側壁の肩部から出土している。竪堀自体がかなり削平を受けているので、削平の際に移動してきた可能性がある。

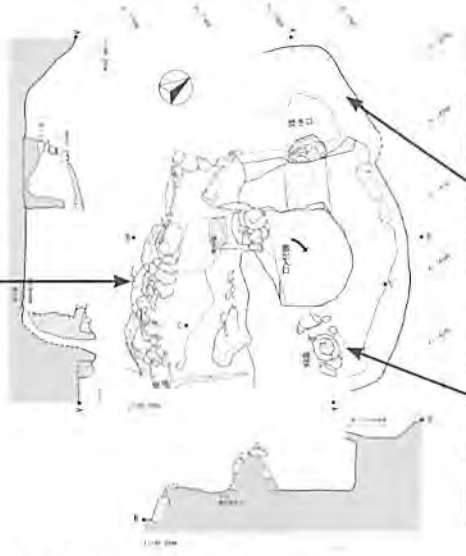
PL. 3　寛永通宝（表）

寛永通宝（裏）

8　その他の遺構

（1）炭焼窯

PL. 4　炭焼窯　搬入口



焚口

天井部及び煙突

図6　炭焼き窯実測図

炭焼窯は、調査時点で27年前まで使われていたということなので昭和時代の遺構である。側面の片側は石積みで作り、粘土を敷き詰めて方形の炭置場を設けてある。煙突部まで粘土で作られていた。天井部の粘土は薄く、崩落していた。焚口には石と瓦が詰められ、搬出口は石で閉じられていた。昭和時代のものであるが、今では見られない炭焼窯であるため平面図を残した。

（2）墓

調査区１区中腹に曲輪状の平坦部がある。
明治及び安政年間の元号が刻まれた墓石である。
墓石の下には骨等の遺物はなかった。したがって、曲輪の再利用であるかは明確でない。

（3）石垣

３区西斜面の谷底部分に石垣ある。石垣上部にトレンチを入れて石垣と用水路の間を調査した。昭和の時代のもので用水を設置した際に設けられた石垣であることがわかった。

用水が流れ込む水田跡には杉の木があり、今回の調査前に切り取られた木幹で年輪を観察したところ 27 年を経ていた。これは水田が使われなくなってからの年代を示していると考えられる。用水はこの水田を整備した際のものであるから杉の木より更に古いが、大正時代までは遡らない。

図７　墓実測図

PL. ５ 石垣（３区）

第４章　総括

第１節　舟渡跡

今回の調査では、調査区１区から土師器小皿４点、石器２点、古銭１点を、調査区２区からは須恵器１点、石斧１点、を検出した。いずれも元位置を留めているとは考えがたい。また遺構としては竪堀の痕と思われる遺構を１基検出したが、竪堀がある斜面自体が削平を受けており、竪堀の床面も掘削を受けていた。

舟渡城は山城である。山城は山頂を削平し、主体を設ける。尾根に沿って曲輪を設けたり、斜面に沿って竪堀を設けたりするが、自然の地形をそのまま生かしたものが多い。今回の調査でも竪堀の跡と考えられる溝状の落ち込みを確認したが、中世の遺物を伴ってはいなかった。主体部は今回の調査区内に入らなかったので、竪堀構築の時期は不明である。

ただ、南北朝時代にこのような山城が盛んに築かれるため舟渡城も当時のものと思われるが、断定はできない。今後の主体部の調査によって明らかになることを期待したい。

明治時代に作られた古城図をみると、現在ある県道がない。谷部が南斜面中央から東側続き、頂上平場南東部へとつながっている。調査区外ではあるが、この谷部の頂上近くで、虎門らしき落ち込み部を検出している。現在は南に伸びる西側尾根に堀切が設けられ県道が走っている。おそらくその工事に伴って南面は大規模な削平を受けたと思われる。

図８　四浦村古城図

第２節　吉永之庄「初神村」

古文書等にもこの「舟渡城跡」は登場してこない。中世における関連する事項としては、舟渡城が所在する「初神村」あるいは「永吉荘」の地名である。「初神」地区が建久二年（1191 年）の良峯師高譲状案（平河文書）に、私領「永吉之庄」の内「はしかみ村」として登場する。近世においては、人吉藩の球磨郡のうち平川村、晴山村、田村村、初神村の４か村を四浦と呼んでいた。

先の良峯（平河）師高譲状案は、地方豪族である平河氏がこの初神の地が含まれる「永吉之庄」を相伝の私領として後世に主張したものであると考えられている(1)。平河氏は、11 世紀に山本郡から下向してきたといわれる(2)。そして、12 世紀には荒田寺や有智山寺を建立し、文治三年（1187 年）の「球磨御領安堵下文」によって、永吉庄球磨御領を安堵されている。ここで、平河氏は御家人と認められたといえる。「永吉庄」は鎌倉時代末期には「小府御領」、南北朝の内乱期においては「太宰少貳頼尚領」であるが、地頭は平川氏であったといわれている(3)。南北朝以後は人吉相良氏に組み入れられていった(4)。

南北朝期において球磨郡は、上相良氏と下相良氏との間で南朝方と北朝方に別れ繰り返し戦いが行われている。このころ山田城や小枝城が築かれ、上相良氏と下相良氏の争いの舞台となっている。舟渡城もこのころのものであると推測するが確証はない。

南北朝時代の城は自然の山の地形を利用した山城で、尾根沿いに曲輪や竪堀、横堀を設けるという施設の面からは簡素な城である。舟渡城はまさしくこの山城の性格を帯びている。舟渡城と共に初神村への進入を防ぐために利用されたのが白鳥城であろうと考えている。白鳥城は初神谷川を挟んで舟渡城の西側にそびえ立ち、舟渡城と同様初神村に存在する（巻頭カラー写真）。今回の調査では明らかにならなかったが、舟渡城の築城期及び勢力等について、今後、文献研究の進展とともに調査区外であった「城」と呼ばれる主郭部分の発掘調査により明らかになることを期待したい。

註

註１　工藤敬一　1992「肥後熊の荘園公領制と人吉荘」『荘園公領制の成立と内乱』思文閣出版

註２　菖蒲和弘　1996「中世」『相良村誌　人文編』相良村

註３　菖蒲和弘　1989「鎌倉・南北朝期の山田村」『山田城跡』熊本県文化財調査報告第 102 集　熊本県教育委員会

註４　菖蒲和弘　1996「中世」『相良村誌　人文編』相良村

引用・参考文献

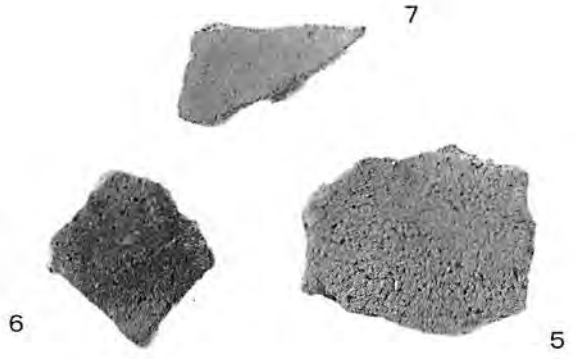
大田幸博　1978『熊本県の中世城』熊本県文化財調査報告第 30 集　熊本県教育委員会
大田幸博　1989『山田城跡』熊本県文化財調査報告第 102 集　熊本県教育委員会
大田幸博　1990『山田城跡　Ⅱ・Ⅲ』熊本県文化財調査報告第 121 集　熊本県教育委員会
工藤敬一　1992「肥後熊の荘園公領制と人吉荘」『荘園公領制の成立と内乱』思文閣出版
木崎康弘　1996『第一章　原始・古代』相良村誌人文編　相良村
矢野裕介　1999『蔵城遺跡』熊本県文化財調査報告第 172 集　熊本県教育委員会
木崎康弘　2000「古代の相良村」『相良村誌人文編』相良村教育委員会
出合宏光　2004「九州南部における 11 ～ 14 世紀の土器」『中近世土器の基礎研究 XVIII』日本中世土器研究会
出合宏光　2008『今村遺跡』相良村文化財報告第７集　相良村教育委員会

写　真　図　版

PL. 6 調査区出土遺物（No.１～１１）

１区　遺物

２区　遺物



２区　遺物（須恵器片）

2区　遺物

9　　10

2区　遺物

11

報告書抄録

ふりがな	ふなとじょうあと
書名	舟渡城跡
副書名	一般県道相良人吉線単県道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査
巻次	
シリーズ名	熊本県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第２５１集
編著者名	後藤克博
編集機関	熊本県教育委員会
所在地	〒862-8609　熊本県熊本市水前寺６丁目18番１号
発行年月日	２００９年１２月２５日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
ふなとじょうあと 舟渡城跡	熊本県 (43)	相良村 (510)	０５２	32° 18′ 17″	130° 50′ 43″	H17.10.24 ～ H18.3.23	7,500㎡	一般県道相良人吉線単県道路改良事業

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
舟渡城跡	中世城	中世	竪堀	磨製石斧 黒曜石 土師器（小皿）	

熊本県文化財調査報告第２５１集
舟 渡 城 跡

平成21年12月25日
編集
発行　熊本県教育委員会
〒862-8609　熊本市水前寺6丁目18番1号
印刷　コロニー印刷
〒860-0051　熊本市二本木3丁目12－37

21　教委　教文
②　003

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 251 集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：舟渡城跡
発行：熊本県教育委員会
〒862-8609　熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号
電話：　096-383-1111
URL：http://www.pref.kumamoto.jp/
電子書籍制作日：2015 年 12 月 24 日